



高精度の検知により「業務を邪魔しないセキュリティ強化」を実現
EPPとEDRをDeep Instinctに置き換え、
コストと運用負荷を劇的に削減

過検知アラートから
解放されることで、
従業員の業務が
スムーズに

最初の侵入を許す
EDRと異なり、
侵入させない
対策を実現

コストは約半分、
運用負荷は約1/10に
大きく削減

企業

因幡電機産業株式会社（以下、因幡電機産業）は1938年に大阪府で創業、電気設備の資材卸商社でありながら、空調部材、情報配線システム、現場の監視カメラなど、3つのブランドで独自製品を展開している。DXへの取り組みに積極的で、文書のデジタル化や自社でデジタル人材を育てるなどの活動を推進。また、持続可能な環境、社会、そして企業経営を目指してサステナビリティ委員会を設置、ESGにも積極的に取り組んでいる。

業種：電設資材事業、産業機器事業、自社製品事業
規模：従業員数（連結）2,586名（2023年3月31日現在）
既存のセキュリティソリューション：ウイルス対策製品、EDR



導入の経緯

EDRの運用がシステム管理課の業務を圧迫

因幡電機産業のサイバーセキュリティ対策は、情報システム部システム管理課が担っている。同課には12名のスタッフがおり、ITインフラグループではネットワークなどインフラ系を中心に、企画から保守・運用までを担当している。約2,300台のクライアントPCをはじめとする社内のセキュリティを管理、運用するほか、DXへの取り組みで日報など社内文書のデジタル化も推進している。

同社のセキュリティ対策方針に関して、「経営層から日々、業務を停めず事業を継続すること、事故を起こして社会的な信用を失うようなことにならないこととされています。また、セキュリティ対策には最新のより良いものを検討するように言われています」と、システム管理課長である藤幹昌宏氏は言う。

こうした考えから、因幡電機産業では2021年にAI型のEPPおよびEDRを導入した。しかし、「EDRは過検知が多く、業務上必要なソフトウェアやファイルまで大量に検知してしまいました」と、同システム管理課の寸田誠氏は当時を振り返る。

例えば、過検知によりクラウドストレージサービスが使えなくなることや、「.dll」や「.exe」のファイルも脅威として検知することも多くあったため業務に支障が出ていた。システム管理課では、「ファイルやサービスを使えない」といった従業員からの報告を受け、その都度一時的にそれらを許可するといった対応が必要になった。SOCなしで社内運営のみだった同社では、EDRの運用負荷の高さに悩まされていた。

また、「2022年の初頭には、マルウェア『Emotet』が流行り、業界内でも話題になりました。もちろん、EDRを導入しているため、仮に攻撃されてもEDRで検知し、ネットワークから遮断するなどの対応はできます。

しかし、EDRは侵入前提の対策なので、少なくとも最初の1台は侵入を許してしまいます。そもそも侵入させない対策が重要だと考えました」と同システム管理課ITインフラグループ長の高橋亮太氏は言う。

選定のポイント

以前から「良い」と感じていたDeep Instinctを選定



因幡電機産業 管理本部
情報システム部
システム管理課長
藤幹 昌宏 氏

そこでシステム管理課では、新たなセキュリティ対策ソリューションを模索し始めた。実は1年前にもDeep Instinctを提案されていたこともあり、今回検討の対象となった。

「1年前にDeep Instinctのことを聞いたときに、深層学習などの機能面をカタログベースで『これは良さそうだ』と思っていました。もう一つは、『侵入されて当然』のEDRではなく、『そもそも脅威を侵入させません』と明言していただいたことが決め手になりました」(藤幹氏)

PoV実施後、正式に導入を決定し、2022年秋には導入を完了した。1カ月ほどで展開でき、大きな問題は発生しなかったという。「今回はサイレントインストールではなく、従業員各自にインストールするよう案内しました。皆さん速やかに実施してくれ、セキュリティリテラシーが向上している印象を受けました」(藤幹氏)

導入時のクライアントPCはWindows 10だが、将来アップデートを予定しているWindows 11に備えて、情報システム部内で動作に問題がないかを、検証していったという。「Windows 11にアップグレードした環境でも、大きな問題は発生していません。また導入当初は管理者のコンソール画面が英語表記で手間取りましたが、現在は日本語にローカライズされたので使いやすくなっています」(寸田氏)

導入の効果

コストは約半分、管理負荷も約1/10へと大きく軽減選

Deep Instinctの導入にあたって、それまで導入していたEPPとEDRは利用を終了した。大きな決断に感じるが、問題がないどころか多くのメリットを享受できているという。「コストについては、EPPとEDRの予算を移行した形ですが、トータルでは年間で約半分に減っています」と寸田氏はまずコストメリットを挙げた。

運用においても、以前は運用・管理に1カ月間で約30時間を費やしていた。しかし、Deep Instinctの導入後は1カ月間に2〜3時間と大幅に短縮できた。セキュリティ

専門組織がない中で、運用時間の削減は大きな効果があったとしている。

また、過検知がなくなったことで、クラウドストレージサービスやファイルが使えないといった問い合わせもなくなり、頻繁に設定を変更する必要がなくなったことも管理負

荷の軽減につながっている。セキュリティにより業務の中断を余儀なくされることがなくなり、生産性も向上していると考えられる。

加えて、「これまで見つけることができなかった脅威を検知でき、迅速に対応できるようになりました」と高橋氏は効果を実感している。藤幹氏も「2023年7月にもEmotetの活動が活発になりましたが、感染は一度もありませんでした。これは誤検知も過検知もなく、脅威を的確に検知していることだと思っています」と効果を語る。

Deep Instinctは、サーバーの一部にも導入しているという。「これにより、サーバーを狙う脅威にも対応でき、攻撃や侵入のきっかけとなる脆弱性への対応にも役立っています。この点でも安心感があります。何より、侵入を未然に防いでいることは大いに評価できます」(藤幹氏)



因幡電機産業 管理本部
情報システム部
システム管理課
寸田 誠 氏



因幡電機産業 管理本部
情報システム部
システム管理課
ITインフラグループ長
高橋 亮太 氏

今後の展望

ゼロトラストの考え方により、セキュリティを強化していく

今後の展望をうかがうと、「Deep Instinctの導入で、エンドポイントのセキュリティ対策は一段落しました。今後はネットワーク系の更なるセキュリティ強化に取り組んでいきたいですね」と藤幹氏は言う。

また、今後のセキュリティ対策においては、ゼロトラストの考え方をベースにしていくとした。ゼロトラストは「何も信頼せず、都度確認を行う」という考え方で、藤幹氏はまずユーザーの認証などから着手していく予定であるとした。

「Deep Instinctは、精度の高い検知によって手間をかけずに高いセキュリティを維持できます。セキュリティが業務を邪魔するようなこともなくなりました。」

因幡電機産業 情報システム部 システム管理課長 藤幹昌宏氏



www.deepinstinct.com/ja | info-japan@deepinstinct.com

Deep Instinctは、世界初かつ唯一サイバーセキュリティのために構築したディープラーニングのフレームワークを使用し、ランサムウェアやマルウェアを阻止するために、予防第一のアプローチを取っています。Deep Instinctは既知のランサムウェアの暗号化速度の750倍に相当する20ミリ秒で脅威を防ぎます。また99%以上のゼロデイ精度と、0.1%未満の誤検知率を保証しています。Deep Instinct Prevention Platformは、既存のセキュリティソリューションを拡張・強化し、ハイブリッド環境におけるマルウェアやその他のサイバー脅威に対する最も完全な保護を提供します。